

ISSN 1883-1656



Центр Российских Исследований
RRC Working Paper Series No. 84

ロシアにおける反移民感情のランドスケープ*

堀江 典生

October 2019

**RUSSIAN RESEARCH CENTER
INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH
HITOTSUBASHI UNIVERSITY
Kunitachi, Tokyo, JAPAN**

ロシアにおける反移民感情のランドスケープ*

堀江 典生†

【要旨】

コーカサスや中央アジア諸国からの移民たちが、ホスト社会であるロシアでどのように脆弱な存在であるかを考察する研究は多いものの、日常生活においてホスト側の住民の目で移民達がどのように映るかを分析する研究は、相対的に少ない。本稿は、日常生活のなかでホスト社会の住民たちが、移民たちが暮らし働く特定の空間のなかで形成した移民のランドスケープをどのように語り、そして、どのように彼らを位置づけているかを探る。移民たちが担い手となっているロシアの特定の市場（マーケットプレイス）に着目し、フィールドワークによる観察とそのローカルな地点に対するクチコミ内容分析から、移民のランドスケープがどのように「穢れ」の空間として位置づけられ、そこで働く移民たちが忌避すべき存在として放逐され、移民労働者たちと市民との間の境界が維持されているかを明らかにする。

Key Words: 反移民感情, ランドスケープ, 境界, ロシア

* 本稿は、科研費（課題番号 18K18538）および人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域推進事業」の成果の一部である。イゴリ・サヴェリエフ准教授（名古屋大学）には査読をして頂き、有意義な助言と示唆を得た。記して感謝したい。

† 富山大学研究推進機構極東地域研究センター教授 E-mail: horie@eco.u-toyama.ac.jp

はじめに

移民たち、特に、コーカサスや中央アジア諸国からの移民たちが、ホスト社会であるロシアでどのように脆弱な存在であるかを考察する研究は多いものの、日常生活においてホスト側の住民の目で移民達がどのように映るかを分析する研究は、相対的に少ない (Kosmarskaya and Savin 2016, Kosmarskaya 2018)。もちろん、レバダ・センターに代表されるように様々な世論調査機関が、ロシアの住民に対し、移民の脅威に対する様々な世論調査を行い、その各種質問に対する数値が学術論文やマスメディアでそれぞれの主張に応じたエヴィデンスとして利用されることはあっても、それがホスト社会の日常生活のなかでどのように可視化され、どのようなランドスケープを構成しているかは、見えてこない。突発的な暴力や事件などで象徴的に論じられる反移民感情であるが、わたしたちがそれを傍観するように、ホスト社会の住民たちもまた、劇場化された反移民感情の発露を傍観する。

ホスト社会が、いまだに十分に移民を受け入れることができず、移民に関する情報を整理し、帰納的に構築したものが移民のステレオタイプである。その形成は、移民を快く受容するためというよりは、移民が異質な存在のまま、すでに自分たちの社会に存在しており、そういう状況にホスト社会がなんとか情報整理して適応しようとする試みの表れである (Dyatlov 2009)。そして、そのようにして構築されたステレオタイプは、先験的知識としてホスト社会の移民たちに対する関係の取り方に影響を与える。移民たちを客観的な証拠もなくホスト社会にとって危険な存在、つまり、犯罪、病疫 (HIV や感染症)、麻薬をもたらし、健全な教育が欠如しており、性欲の抑制が効かず市民に危害を加える危険な存在としてメディアが描き、彼らのステレオタイプ化に積極的に関与しているという (Kuznetsova 2017)。

後に論じるように、突発的な反移民感情の爆発を取り上げて、象徴的に反移民感情の高揚とその政治的利用を論じる論文は多い。例えば、政権の反移民感情の利用が、合法的な移民たちを非合法的な存在に落とし込み、また、彼らをその日常生活のなかで「死ぬにまかせる (letting to die)」存在としているかを、生と死のポリティクス (ネクロポリティクス) として移民たちの側から描く試み (Round and Kuznetsova 2016) も、その一例である。本稿は、そうした議論と一線を画し、日常生活のなかでホスト社会の住民たちが、移民たちが日常において暮らし働く特定の空間のなかでどのように移民のランドスケープを語り、どのように彼らを位置づけているかを探る。本稿の研究は、特定の (半) 閉鎖空間である市場 (マーケットプレイス) を対象としている。本稿で採用した研究の方法論は、複合的な質的調査である。フィールドワークによる研究対象の観察は、現場での市民へのインタビュー、画像、現場を運営する企業の提示する情報、マスメディアが提供する現場の情報、現場に関わる事件の報道などを分析対象としている。また、研究対象に対するソーシャルメディアのクチコミをテキストマイニングすることにより、日常生活における市民の移民のランドスケープに対する対峙の仕方を内容分析している。そうすることで、突発的な反移民感情の爆発を伴っていない日常生活のなかで垣間見られる移民たちとホスト社会との関係を明らかにするとともに、どのように移民たちがホスト社会で周縁化されているかを理解することができよう。

観察対象としてのルイナックのランドスケープ

ロシアでは、市場（マーケットプレイス）というローカルな空間のことを、ルイナック（рынок）やバザール（базар）と呼ぶ。バザールという表現のほうが、ルイナックよりも東洋的で原初的なマーケットプレイスを指すことが多い。また、ヤルマルカ（ярмарка）は、定期市に相当する言葉であるがマーケットプレイスを表す言葉としてよく使われ、バラホルカ（барахолка）も、本来、蚤の市を表す言葉であるが、露店が広がるマーケットプレイスを表す言葉としてよく利用される。ここでは、そうした区別にこだわらず、ロシアのマーケットプレイスをルイナックと総称する。社会的空間は社会的に生産されるということから考えれば、ルイナックは、特に何もなかった空間に卸売業者、小売業者、購買者、労働者などルイナックの実践を担う主体が集まり、自然発生的にルイナックの境界が形成され、管理され、秩序が形成され、「体験される空間」が形成されることもあれば、すでに何らかの構造物によって境界が形成されており、そこに諸主体が集まり、そうした主体によってルイナックとしての意味が付与され、ルイナックという「体験される空間」が形成される場合もある。

移民たちが主な卸売業者や小売業者、労働者として構成するルイナックとなると、そのアッサンブラージュはより複雑である。ロシアにおける移民たちが主な担い手であるルイナックは、現地の住民たちが異文化の商品やサービスを求める「コスモポリタンの消費」（Parzer and Astleithner 2018）の場というわけではない。もちろん、ロシアにおいても、それぞれの少数民族文化に付随する商品が、その少数民族によって販売され、「コスモポリタンの消費」が行われることはある。しかし、ロシアの移民たちが担うルイナックの形成は、少数民族のディアスポラや新たな移民の需要を満たしたり、彼らの文化を色濃く繁栄した商品やサービスを提供するために形成されたりしているわけではなく、ロシア市民の日常の需要を満足させるために形成されたと言える。例えば、ロシア東部に1990年代に散見されたいわゆる中国人ルイナックにおいては、その形成期においては中国からの輸入品が主な商品であったし、現在も形を変えて残る中国人ルイナックも中心的な商品は中国から輸入されている。しかし、それらは商品そのものが中国の文化コードと密接に関わり、その理解なしには消費できないというものではなく、衣服や靴や日曜雑貨など日常的にロシアの市民が消費する品物であった。それは移民たちによる起業であり、移民たちが営む経済ではあったが、市場経済化初期において物不足に陥ったロシアにおいて、既存の必需品の不足の代替物であり、品質はともかく欧米諸国や日本などからの商品とは価格面で競争力をもつ商品群がルイナックの空間を埋め尽くしていた。現在、ロシア東部のかつての中国人ルイナックは、特定の民族の移民たちが起業し、その移民たちが営む経済ではなく、多くの民族が事業に関わる多民族マーケットプレイスとなっており、エスニックな空間を維持しつつも、その空間に付随していた「中国なるもの」は大きく変容している（Horie and Grigorichev 2015）。ロシア欧州部の大都市においても、同様に、市場経済化初期にロシアの市民が日常的に消費する商品が移民たちによってもたらされ、エスニックなルイナックを形成した。シベリアとは異なり、中国人が寡占的に形成したルイナックなるものがあったわけではないが、コーカサス諸国や中央アジア諸国、アルメニアなどからの移民たちがルイナックの形成に大きく関わり、それらの国々で生産される果物や野菜、または、それらの国々を經由して輸入される商品がルイナックを埋めた。安価であることが、こうしたルイナックを市民の購買の選択

肢となっている¹。

本稿において、こうしたルイナックのランドスケープに着目する理由は、ルイナックが様々な民族的背景をもつ移民たちを担い手としており、その空間が物理的に境界をもち、日常生活において市民がその空間に侵入することで日常生活における購買を行う一方で、それらが移民たちによって形成されている異質な空間であると地域住民に認識されているからである。ルイナックの境界は、本稿の分析において非常に重要である。移民たちと受け入れ国の社会とを分ける境界は、どのように私たちの目に具体的に現れるかを考察する際、フィールドワークにおいては、まずは物理的な境界を探ろうとする²。それは、フィジカルであるという意味でルイナックのランドスケープの主要な構成要素である。移民たちが暮らし働く場所を明確に地域住民から隔てる壁や門などのフィジカルな境界は、移民たちを特定の空間に封じ込める力をもつし、同時に、移民たちの安全をも守る力がある。そうした境界が地域のランドスケープとして存在すれば、地域住民にとって、その境界は特定の目的以外には自由がきかない空間として疎外される。移民たちを大量に受け入れながらも、決して移民たちが混在する社会のあり方に移民たちと地域住民の双方が適応できていないとき、双方を隔てる境界は物理的な壁やゲートによって支えられる。ルイナックにとって、市民は招かれる客ではあるが、その住人ではないし、その成員ではない。市民は、客としてそのルイナックを構成するアクターではあるが、「よそ者」である。私たちの日常生活においても、コミュニティ資格者でなければ入れないマンションなどは、「Gated Community」として描かれうる。もともと、この「Gated Community」は、高所得者、いわば「セレブ」が自分たちの居住空間を地域住民から隔絶させたものである(Bagaen and Uduku 2010)。受け入れ国の底辺社会に生きる者として描かれる移民たちもまた、地域住民から自ら距離を置き、また、地域住民側から距離を置く形でこうした閉ざされた空間を形成する。移民たちが集住する地区は、移民たちの集住地区 (ethnic enclave) や「移民ゲットー」として描かれてきた。他者から隔絶され物理的な境界や門やフェンスの背後の制約された空間に生きる暮らしを、Brunn は「閉ざされた暮らし (Gated Lives)」と表現し、そこでの他者からの厳しい偏見やステレオタイプ、受け入れがたい排除を反映した彼らの姿勢を「閉ざされた心匠 (Gated Minds)」と表現した (Brunn 2006)。物理的な障壁に着目しながら、閉ざされたルイナックという空間をめぐる日常生活のなかで反移民感情がどのように発露するかを本稿では考察する。

ロシアの反移民感情とルイナック

ロシアのルイナックは、ソ連時代の遺制からなる諸要素と市場経済化のなかで新たに生み出された諸要素からなるアッサンブラージュとしてエスノ・ランドスケープを形作っている。ルイナックは、ゲートやフェンスなど物理的な境界をもち、外部世界と分かち。移民

¹ こうした点は、欧州のスーパーダイバーシティを前提としたエスニックマーケットプレイスとは性質を異にする。ロンドンを辞令として論じた Vaughan (2015)は、「ありきたりの日々の生活の需要が多様化した都市文化の要求と合致する」空間としてのエスニック市場を描くが、その需要を満たしているのは、特定の民族的性格をもつ商品である。

² 移民たちが働く建築現場という壁に囲まれた空間の調査は、堀江 (2018) を参照されたい。

たちが、ルイナックという空間に侵入し、その境界内での実践を日々行うことは、移民たちが既存の移民空間に包摂されるというだけではなく、彼ら自身が自ら空間を生産・再生産しながら、自らの空間的属性を規定していく過程を表している³。民族的にマイノリティである人々によって閉鎖的な社会が飛び地のように都市のなかで形成される場合、エスニックなつながりを頼りとした集住地区（エスニック・エンクレイブ）が形成される。ロシア、特に、モスクワでは、移民ゲッターのように集住地区そのものの形成は確認できず、「移民のためのインフラ」の提供がカフェや移民によるメディカルセンターや、移民たちと法的・行政的なサービスと仲介する業者などによって行われているという（Peshkova 2015）。Dmitriev and Piadukhov (2005)は、移民たちは、自ら商売をやるか、ロシア人に雇用されるかのどちらかであるとし、前者の卸売・小売業に関わる人々が集住し、民族的つながりや縁故関係をビジネス面および雇用面で重視しているエスニック・エンクレイブの場として、ルイナックを描いている。その意味で、ルイナックは、移民たちの集住空間であり、就労の場であり、「移民のためのインフラ」である。

都市のランドスケープのなかに「飛び地」としてエスノ・ランドスケープであるルイナックを形成することで、ルイナックは地域住民にとっては安全が保証されない場として認識されるが、逆に、ルイナックの境界は移民たちにルイナック内の安全を保証する⁴。その空間内部では、移民たちだけの雇用が守られ、特定の商品に関する独占が形成され、課税圧力を弱めるなどルイナック特有の比較優位が暗黙のうちに生まれる。そして、受入社会の住民は、移民たちと競合関係を形成し、ルイナックに対する否定的な態度を示すようになり、移民たちを危険な存在として捉えるようになるという（Dmitriev and Piadukhov 2005, 92-93）。モスクワ市内務総局長アナトリー・ヤクーニンは、イスラム国やそのほかの過激組織の脅威に関してモスクワ市警察の対応を聞かれたとき、それらの脅威に関連して、モスクワ市内の警備強化を図っており、「外国人や過激主義者などが屯する工場地帯やルイナック」などで警戒を強めていると回答している⁵。移民と怪しい過激派をつなげてルイナックはイメージ化され、それが報道で拡散されている一例である。そのため、公共の場での移民たちと地域住民との間の利害対立は、公然とした衝突や暴力によって発露する。

こうしたルイナックと移民との関係を断ち切る試みを政府は実施してきた。2007年の移民法改正で小売業店頭での外国人労働者の就労が禁止された。この法改正は、ロシアにある多くの移民が担い手となっていたルイナックに大きな影響を与えた。イルクーツクの中国人小売業者が中心となっていたルイナックでは、中国人小売業者がルイナックで働くことができなくなり、そのルイナックの周辺に住んでいた中国人はイルクーツクを去って行った（Horie and Grigorichev 2015）。モスクワ市やサンクトペテルブルク市においても、ルイナ

³ ルフェーブル（2000, 294-295）による空間的身体の生産・再生産の論述を参照されたい。

⁴ また、ルイナックという空間のなかには、移民たちの暮らしに不可欠なサービスも内在化され、「移民のためのインフラ」（Peshkova 2015）が形成される。ルイナック内部が移民たちにとってどのように安全か、また、必要なものが手に入るかは、堀江・リヤザンツェフ（2010）も参照されたい。

⁵ Interfax: <https://www.interfax.ru/moscow/478486>（2019年4月19日取得）

ックは、様々な方法で解体され、縮小されていった。連邦法 No.271「小売市場およびロシア連邦労働法典改正について」(2006年12月30日付)によりルイナックの構造や許認可が厳しく規定され、それに違反するサンクトペテルブルク市とモスクワ市のルイナックは2012年7月1日までにそれらの規定に適合するようにするよう求められた。2009年には、ヨーロッパロシア部最大のルイナックであったチェルキゾン(チェルキゾフスキー・ルイナック)が閉鎖された。モスクワ市には、2011年には77のルイナックがあったが、2012年には53、2013年には51箇所まで減少した⁶。2015年1月までにモスクワ市は市内30箇所のルイナックを閉鎖した。また、2016年2月9日にモスクワ市は市内の不法建築物の解体を行政執行した。そのなかには、多くのルイナックが含まれていた。

ルイナックの境界周辺とその内部は、市民と「よそ者」たる移民たちが交流する空間であり、また、多様な民族的背景をもつ人々が互いに交流する場である。しかし、それは同時に衝突をも引き起こす空間である。2010年12月、若者同士の喧嘩で北コーカサス出身者の銃撃によりモスクワのサッカーファンの若者が死亡した。それに抗議し、過激な民族主義者を含む数千人がモスクワ市中心のマネージ広場に集まり、非スラブ系と思われる住民などに無差別に攻撃を加える事態となった。状況をコントロールしようとして政府は機動隊(OMON)を投入し、ラリー参加者多数と右翼系団体幹部を逮捕するに至った。多数の負傷者がでたこの事件は、国内治安問題となった。政権が北コーカサス地域に相対的に優遇された財政投入を行っていることに反対し、ラリー参加者は *Stop feeding the Caucasus* をスローガンにしていた。Kolsto(2016)は、プーチン政権は2010年までは民族主義者たちの活動がある程度容認していたものの、この暴動を契機に態度を変更したと言う。それまでは、国民の間に広がる民族主義的感情を政権支持にうまく利用してきたが、その戦略も変更を余儀なくされたという。それは、政権が一方的に過激な民族主義運動に背を向けただけでなく、民族主義者側もまた政権への批判を強めていったように、双方向の戦略変更であったという。

2013年7月27日、モスクワ市のマトヴェエフスキー・ルイナック周辺で発生した事件は、警察官がレイプ容疑でダゲスタン人を拘束しようとしたときに、このダゲスタン人の親族が警察官に暴行を働いたことに端を発している。このときの映像は、瞬く間に拡散し、モスクワ市警察は、ルイナックおよび北コーカサスや中央アジアからの移民が集住する地域の犯罪を排除する名目で、二日間大規模な取り締まりを行い、警察によれば470人の移民たちが拘留された。拘留施設が不足し、拘留者を一次的に留置するキャンプが設営された。拘束された移民たちのなかには、多くのベトナム人も含まれていたとされている(Tkach and Brednikova, 2016)。数週間の間、モスクワやサンクトペテルブルク市のルイナックを群衆が襲い、警察も荷担し、ルイナックで果物などを売っている移民たちは殴られ、拘束され、商品は壊された。Abashin(2017)は、この事件に触れ、日常の事件であったものが、モスクワ市長選のキャンペーンに利用されたと論じている。モスクワ市長のセルゲイ・ソビャーニンは、この事件を取り上げ、移民問題に取り組む市長であることを印象づけようとしたが、対立候補であり、政権の汚職を追及し、リベラル派であり、親米派とされるアレクセイ・ナワリヌイは、この移民問題を政権の腐敗を追及するレトリックに取り込もうとした。ナワリヌイがエスニック・ロシア人による民族主義と深く繋がっており、リベラルな価値をもつ民族

⁶ Российская газета: <https://rg.ru/2013/08/02/rinki-site.html>

主義者であることは多く指摘されている (Coalson 2013, Kolstø 2014, Larulle 2014, Kolstø 2016)。ナワリヌイのレトリックにおいては、ロシア、特にモスクワに移民が多すぎるという事実は、モスクワの官僚の殖財と腐敗に関係しているというのである。ナワリヌイは、中央アジアや北コーカサスからの移民の犯罪への関与も取り上げた。アレクセイ・ナワリヌイは、Abashin (2017)によれば、自らを穏健な欧州タイプの民族主義者と位置づけており、フランスのルペン率いる国民戦線やオランダのウィルダース率いる自由党などを引き合いに出している。このキャンペーンで、ロシア自由党のジリノフスキーもこの問題についてナワリヌイに近い立ち位置を示していた。リベラル派のヤブロコ党は、ナワリヌイの民族主義者との同盟を批判しながらも、移民による衝突が増えていること、安価な外国人労働者が大挙してモスクワ市に流入したせいで地元労働者が労働市場から駆逐されていることを問題視していた。つまり、この市長選で反移民論調は対立候補間で共有され、移民問題は最も議論された論点であった。

Laine (2017) は、民族中心主義的なナショナリズムに対し、2013年までは政府は寛容であり、反移民感情を煽る彼らの主張は国営メディアによって拡散されていたが、2013年のマトヴェエフスキー・ルイナックでの事件に伴った暴動、および、ユーロマイダンとその後のクリミア危機、ウクライナ東部での紛争のなか、反移民的主張は勢いを失った、としている。それまでは、反移民感情を国営メディアを使って煽りつつ、政権は国民に広がる反移民感情を政権がつくる「コンセンサスとしてのナショナリズム」のために利用していたという。Round and Kuznetova (2016)も、2013年のモスクワ市長選を反移民感情の転換点として描き、政権と反移民感情との関係を描いている。ただし、政権と反移民感情との関係は、それほど明らかなものではない。Gorodzeisky et al. (2015) は、欧州社会調査のデータを活用して、反移民感情を政権が誘導しているとする明確なエビデンスはないと論じている。Chapman らの研究も政権と反移民感情との関係は明確ではないとしている (Chapman et al. 2018)。

2013年10月には、モスクワ市南区ブリュリョヴォ地区でも暴動が生じている。25歳ロシア人男性がルイナック近くで中央アジアもしくはコーカサスからの移民とおぼしき者に殺害された。これに抗議する市民が暴動を起こすに至った。この事件は、マスメディアを賑わせ、警察は捜索において大量の移民を拘束した。事件後、移民たちが多く働くこの地区のルイナックの閉鎖を求める声があがり、翌年1月にはそのルイナックは閉鎖された。ロシアで反移民感情を発露させた暴動が、頻繁にルイナックの近くで生じていることは、ルイナックのもつエスノ・ランドスケープと深く関連していると言える。次節では、反移民感情とルイナックのエスノ・ランドスケープとの関係を、具体的なルイナックのランドスケープを通して観察する。

センナヤ広場のエスノ・ランドスケープ

センナヤ広場のルイナックは、サンクトペテルブルク市のなかでは最も古いルイナックのひとつである。18世紀にセンナヤ広場の入口で干し草（ロシア語でセナ）が売られていたことが、この広場の由来と言われている。農民がここに集まり、自分達で作った野菜や肉を露店で販売したことが、ルイナックの起源である。1930年代にルイナックは取り壊され、別の場所に移転した。センナヤ広場にルイナックが戻ってきたのは、1987年である。セン

ナヤ広場は、1992年までは平和広場と名付けられていたが⁷、オリジナルの名前を取り戻したのは、1992年になってからである。帝政時代も、この広場周辺は貧困地区の様相を示していたようだ。ドストエフスキーの『罪と罰』では、いかがわしい遊び場に近く、露店が並び、雑多な職人やぼろをまとった人々が集まる居酒屋があり、家々からは悪臭漂う場所として描かれ⁸、『未成年』では、追い剥ぎが現れる場所として描かれている⁹。いまも、ルイナツクの「胡散くさい雰囲気」(山田・山田 2010)は、日本人訪問者によって描写されている。ここが、地域住民にとっても「薄汚い場所」¹⁰や「危険な場所」(Zhel'nina 2011, p. 56)と受け取られることは、過去においても、1990年代と2000年代を通じて、この広場の特徴であったと言える。そのイメージは、ホームレス、スリ、麻薬常習者など周縁化された人々が集まる場所であるとされてきた (Zhel'nina 2011, p. 56)。

センナヤ広場のルイナツクは、広義にはセンナヤ広場前―帯を指している。広場前に1990年代に青空市場が開かれていたためである。2003年に商業パビリオン(ショッピングセンター)がこの空間のなかに建設された。ルイナツクは、新しく建てられた近代的なショッピングセンターの「ピーク」と「センナヤ」に加え、その南側にある低階層構造のテナントショップ群を運営する「セノイ・ルイナツク」によって形成されている。「ピーク」と「センナヤ」はエフィモヴァ通りを隔てているので、「ピーク」は、「センナヤ」と「セノイ・ルイナツク」とは空間的にはやや切り離されている。「センナヤ」と「セノイ・ルイナツク」とは異なる運営会社によって管理されている。それゆえ、狭義には、このテナントショップ群をセノイ・ルイナツクと見なすこともできる。市民にとって、ショッピングセンター「センナヤ」と「セノイ・ルイナツク」をセノイ・ルイナツクと見なす者もいる。ショッピングセンター「センナヤ」とその南側のテナントショップ群は、セノイ・ルイナツクと表示された同じゲートをくぐり入場するため、ルイナツクの空間としては一体化しているからである。1990年代のセンナヤ広場を知る市民へのインタビューでは、セノイ・ルイナツクという言葉からイメージされる場所は、センナヤ広場―帯であるとの認識が示されていた¹¹。本稿の観察においては、センナヤ広場のルイナツクという場合は広義で論じ、「セノイ・ルイナツク」という場合は狭義の意味で論じている。

⁷ 平和広場と名付けられていたのは、1952年から1991年までである。

⁸ センナヤ広場の悪臭や露店の描写は、ドストエフスキー(1978, p. 8 および p.68)を参照されたい。

⁹ その描写は次のとおりである。「どうしたんだ、誰もはぎとりやしないじゃないか、いったい追剥はどこにいるんだ? なんでも、センナヤ広場に追剥が出るという噂だが、さあ、来るがいい、なんなら、毛皮外套をくれてやるぜ。」(ドストエフスキー 1979, p.215)

¹⁰ Regnum: <https://regnum.ru/news/2184989.html> (2019年4月25日取得)

¹¹ また、地元ガイド(Открытая карта)が描くセノイ・ルイナツクは、露店を中心としながらも、傍のショッピングセンターも含めた紹介となっている。Открытая карта: <https://np-mag.ru/mesta/gdekupit/sennoj-rynok-s-gidom/> (2019年5月19日取得)。



写真1 エフィモヴァ通り（右奥が「ピーク」）（2018年10月筆者撮影）



写真2 セノイ・ルイナックのゲートと「センナヤ」(2018年10月筆者撮影)

衛生設備を備えていない店は、法律によって青果の小売りに特化されている。2016年9月にセンナヤ広場の違法販売店の排除を目的とした行政代執行が行われた。市当局にしてみれば、違法営業をルイナック内部およびその周辺から駆逐することが、この地域を近代化し、安全にするためには不可欠であった。露店の様相をもつ店が青果品に限定され、そこが

ルイナックのなかで特に異彩を放つエスノ・ランドスケープを形成しているのは、この行政代執行の帰結である。これにより、センナヤ広場のルイナックは、近代的なショッピングセンターと、その周囲の昔ながらのルイナックの姿の両方を併せ持つ、特異な空間に再編された。



写真3 セノイ・ルイナックの青果売場（2016年10月筆者撮影）

センナヤ広場のルイナックは、「危険な場所」であると同時に、ショッピングセンターは安全と安心を提供する場である（Zhelnina 2011, p. 56）。ショッピングセンター「ピーク」は、スーパーマーケット「ペレクリョストク」の上にあるが、両者の入口は別としている。スーパーマーケットにやってくる購買者は、社会階層が多様であるが、ショッピングセンター「ピーク」のターゲットは、比較的豊かな層や若者たちであり、経営者がルイナックに訪れる一般客と「ピーク」を訪れる客とを物理的に分離させようと意図している。ショッピングセンター「センナヤ」とその他のテナントショップ群との間にも、その区別がある。そのことは、このルイナックのランドスケープを特徴づけている。近代的な複層階のショッピングセンターを、それと比べみずばらしく映るテナントショップ群が囲む。テナントショップの裏側に行けば、200ルーブルで髪を切ってくれる床屋がある。フィールドワークに同行してくれた市民によれば、ここで働く移民労働者でも利用できるように、驚くほど安いのだそうだ。「移民のためのインフラ」（Peshkova 2015）とも解釈することができよう。露天で青果を売るのは、コーカサスや中央アジア諸国からの移民たちとおぼしき人々であり、ショッピングセンター内のエスニシティとの違いを際立たせている。

この危険と安全・安心を一つの空間のなかに共存させているセンナヤ広場のルイナックの二重性は、市民のルイナックに対する認識に影響を与えている。16歳から20歳の若者たちは、「ピーク」を「仲間が集まる場所」と位置づけており、集まるのは「知り合い」であ

り、ライフスタイルが近似した特定の都市住民層の者たちであるという (Zhel'nina 2010, p. 332)。つまり、若者たちにとって「ピーク」に集まる者たちは、「われわれ」であり、それ以外のお店に集まる人々は「他者」であり、社会階層を明確に分けるランドスケープが形成されている。

低階層構造のテナントショップ群を中心とした「セノイ・ルイナック」が、ゲートによって境界づけられた空間を形成し、移民労働者を中心としたアクターによってルイナックを機能させ、民族的に「われわれ」と「よそ者」を分かち、社会階層的に「われわれ」と「他者」を分かちランドスケープを形成していることは、「セノイ・ルイナック」で働く移民たちが「閉ざされた暮らし (Gated Lives)」を形成していることを暗示している。前節で論じたように、こうしたルイナックの境界周辺では移民たちと市民との間の、もしくは異なる民族間の衝突が生じやすい。センナヤ広場のルイナックも例外ではない。2013年4月11日にセンナヤ広場のルイナックで集団衝突が生じた。機動隊 (OMON) が投入され、多くの移民市場関係者たちが拘束された。移民たち同士の衝突と報道されたものの、現実には北コーカサス地域からの移住者とタジク人市場関係者との衝突で、殺害されたのはカバルダ・バルカル共和国からの移住者、つまり、ロシア国民であった。ルイナックから連想されるエスニックなランドスケープがもたらす誤解と偏見は、ロシアの日常生活のなかで維持されている。

エスノ・ランドスケープに対する市民の受け止め方

広義のセンナヤ広場のルイナックではなく、狭義の「セノイ・ルイナック」へのグーグルマップでのクチコミのうち、テキストを載せているクチコミのみに着目し、ルイナックの担い手として外国人やエスニック・ロシア人以外に言及しているもの、もしくは、ルイナックのエスニックな特徴に言及しているものを分析対象として、ルイナックのエスノ・ランドスケープに接近してみよう。以下で取り上げる取り上げたクチコミが、方法論的にも、サンクトペテルブルク市民を必ずしも代表するものというものではないことは、最初に断っておかねばならない。本稿では、2018年11月に試験的に収集したクチコミの分析をパイロット調査とし、2019年4月に再び新たなクチコミと見逃したクチコミの確認を行い、結果、44件のクチコミを分析対象としている。「セノイ・ルイナック」に対するグーグルマップのクチコミ件数は、調査時点で3268件である。本稿が取り上げた44件のクチコミは、全体の1.3%程度である。ただし、このルイナックにおける反移民感情の分析にとって、クチコミ数が少ないことを意味するわけではないし、多いことを説明しているわけではない。そもそも、テキストを投稿しているクチコミは、多くない。五段階評価のみを与えて、クチコミにテキストを載せていないものが圧倒的に多い。また、マップユーザーの投稿コンテンツに関するポリシーにおいて、人種、民族、宗教、国籍、制度的人種差別など、移民問題に関わり「個人またはグループへの憎悪を促す、差別を助長する、または誹謗」するような投稿コンテンツは、削除されうる。それゆえ、外国人への誹謗中傷がもともと多いのか少ないのかを、抽出可能な投稿コンテンツから判断することはできない。さらに、「セノイ・ルイナック」へのクチコミは、多様であり、反移民感情が支配的というわけではない。また、商品の品質のみを取り上げるクチコミは、多い。それでも、フィールドワークにおいて明らかに外国人労働者が目立つ場所が「セノイ・ルイナック」であることから、このクチコミに移民

たちに関わる表現が見いだしやすいことは、確かである。

本稿では、取り上げたクチコミのテキストのなかから、ルイナックの担い手としての外国人を表す表現を取り出す作業から始めた。投稿コンテンツのうち、ロシア語単語テキストだけを集めれば 2022 単語が含まれている。そのなかに登場する外国人を表す言葉は、38 表現あった。うち、民族名として表れた表現では、ウズベク人（7 件）とタジク人（4 件）である。中央アジア諸国の人々としている表現も 3 件あった。「黒い肌をした人々」など、ウズベク人を連想させる隠喩的表現もあった。「アジアの共和国からきた我々の友人達」、「隣の友好諸国の販売員」も中央アジアを連想させる。「南の人々」などの表現もコーカサス諸国と中央アジア諸国からの移民たちを連想させる。この表現は、移民のステレオタイプとして語られる表現である（Dmitriev 2015）。また、「南の人」という表現は、2013 年のブリュリョヴォ暴動の契機となった殺人の容疑者に対して、捜索段階で中央アジア諸国もしくはコーカサス諸国出身とおぼしき人々を指す言葉として報道でも利用されていた表現でもある。そのほか、北コーカサスの人々とした表現もあったが、中央アジアというキーワードに比べ、目立った表現ではない。こうした表現から、このルイナックのランドスケープは、中央アジアやコーカサスからの移民労働者が闊歩し働く姿がイメージ化されたものであることがわかる。

「アジア人」、「アジア系民族」、「アジアから来たお客さん」といった表現や、「東」からの人々を表す表現などでは、中央アジアやコーカサスを想定したものなのか、中国やベトナムまでを含めた表現なのかは、定かではない。「中国人」は 1 件だけ登場するが、否定的な表現ではなく、ルイナックに対する肯定的評価のなかで言及される。品質の悪い商品として中国製品をやり玉にあげる表現は見られるが、アジアという表現のなかに中国が意識されているわけではないように思われる。サンクトペテルブルク市の地域住民にとって、アジアや南や東は、中央アジアを意識したものであると捉えるほうが、投稿コンテンツの内容に沿っている。

「移民」、「不法移民」、「外国人」といった表現の他に、他者を明確に表現するのではなく、「われわれ」でないことを表現するため、ロシア人でないこと、非ロシア人であること、ロシア語をしゃべることができない、もしくは、理解していない人々として描かれる担い手も 10 件登場する。「非ロシア人」という表現は、7 件あり、「ロシア人的な外見をもたない販売員」といった回りくどい表現もあった。以上のことから、「セノイ・ルイナック」というランドスケープの主要な担い手は、「われわれ」ではない他者であり、非ロシア人であり、特に、中央アジアやコーカサスからの移民たちとしてイメージされていることがわかる。

こうしたルイナックの担い手としての移民たちの特徴は、どのように表現されているだろうか。25 表現を抽出できた。「荒っぽい」、「厚かましい」、「のろま」、「粗野」、「礼儀正しくない」、「文化的でない」、「教養のない」、「人間でない」など、移民たちを文明化されていない者とした表現が散見される。トルコから中央アジアまで広い地域で似た言葉を持ち、直接的には「動物」を意味し、スラングとして「愚か者」を意味する heywan (хайван) という言葉を使った表現も見られた。

ルイナックのエスニックな特徴を表現しているクチコミのうち、移民たちへの直接的な言及だけでなく、ルイナックそのものの特徴を言い表す表現も取り出してみよう。28 表現を抽出したが、「汚い」、「臭い」、「非衛生的」など、ルイナックの衛生状態が悪いことに対

する指摘が10件あった。非衛生的であることは、このルイナックの担い手を特徴づける表現として、目立つ。「汚れた手」という表現は、ルイナックにある店が野菜や果物を扱っていることを象徴すると同時に、もしくは、それ以上に、これらの店で働く労働者を非衛生的な存在と特徴づけていることが窺える。これらの表現は、移民たちが働くルイナックが露店に似た様相の店であり、そこは非衛生的であるとのイメージがあることを言い表している。「動物園」との表現もあるが、これも非衛生的であることの隠喩であると考えられる。

「セノイ・ルイナック」が、アプラクシン・ドヴォールのルイナックに類似するルイナックであるとの表現も2件あった。アプラクシン・ドヴォールのルイナックは、地元ではアプラシカと呼ばれ、移民たちが働くルイナックとしてサンクトペテルブルク市では代表的な場所で、「セノイ・ルイナック」よりも大規模なルイナックである¹²。「東方のバザール」や「ドゥシャンベのどこかにいるよう」などの表現は、このルイナックが東洋的で原初的なマーケットプライスであることを連想させる。その連想に潜むのは、移民が中心となって活動するルイナックの無秩序である。「移民庁は黙ったままである」や「反汚職委員会はなにもしない」といったクチコミがあるのは、ルイナックという閉鎖空間のなかで繰り広げられる汚職である。リベラル派のジャーナリストであり、有名なキャスターであるウラジミール・ポズネルの言葉を引用するならば、市民に広がる反移民感情や民族主義の高まりは「移民たちの問題ではなく、政府の官僚の汚職であり、民族政策の欠如」¹³である。

センナヤ広場のルイナックというランドスケープは、エスニックな表現を伴う場合には、主に露店とも言える様相のテナントショップ群を中心としたランドスケープである。併設された近代的なショッピングセンターは、そのランドスケープからは外れる。そこで働くのは、外国人であり、非ロシア人であり、特に、中央アジアからの移民たちであり、彼らの様相も含め、ルイナックは非衛生的なものとしてイメージ化されている。その結果、これらのクチコミは、ルイナックという空間の一部をはぎ取り、忌避すべき近代化されていない「穢れ」の空間として表現していると考えられる。

エスノ・ランドスケープの境界維持

センナヤ広場のルイナックの一部を構成する低階層構造のテナントショップ群は、サンクトペテルブルク市民にとって、忌避すべき「穢れ」の空間として画一的なイメージが確立しているわけではない。すでに述べたように、ショッピングセンターの「センナヤ」と「パーク」に対して、そうした移民たちに関わるクチコミを見いだすことはほぼない。また、定型層構造のテナントショップ群に対しても、野菜や果物の新鮮さや安さを取り上げて、肯定的な評価をするクチコミも多い。アプラシカに比べ、セノイ・ルイナックに対する肯定的評価は多く、また、移民たちに関わる言及も少ない。それでも、アプラシカではなく、セノイ・ルイナックを本稿の調査対象にした理由は、危険と安全・安心を一つの空間のなかに共存させているセンナヤ広場のルイナックの二重性に着目し、近代化するルイナックのなかで、

¹² 現在、アプラシカのエスノ・ランドスケープに関する調査も進めているが、詳細は別稿に譲りたい。

¹³ Познер Online, О межнациональных столкновениях: <https://pozneronline.ru/2013/10/5447/> (2019年5月22日取得)

1990年代的な様相をもつショッピング群などによって形成されたエスノ・ランドスケープが移民たちによって生産、再生産され、ルイナックの境界の外側から異質な移民空間としてイメージ化されているからである。それは、ルイナックのゲートによって境界づけられ、市民はゲートをくぐり、その空間を体験する。ルイナックという空間が、移民たちの取り締まりの対象となり、その境界の周辺においてエスニック・ロシア人と非ロシア人との間の、もしくは非ロシア人同士との衝突が生じるゆえんである。

市当局は、こうした空間を「穢れ」の空間として市内から放逐すること、もしくは、解体することによって、移民たちが暮らし働く社会の問題を隠蔽しようとしている。エスニックなルイナックが、1990年代の不安定なロシアの残存であり、忌避される空間であり、放逐すべき空間であるとするのは、ロシアの不安定さを移民たちに押しつけ、彼らを忌避すべき存在として遺棄する行いである。非衛生的であることが、常にルイナックとそこで働く外国人労働者を排除する論理となっている。このことは、センナヤ広場のルイナックだけでなく、近年のロシアのルイナックにおいて散見される事実である。当局からすれば、それは反移民感情に基づく行政執行ではなく、労働行政に基づく執行である。しかし、中央アジアからの外国人労働者が集まり働くルイナックという空間が非衛生的空間であるとの空間イメージが形成されているなかで、ルイナックのランドスケープを再編し、外国人労働者を放逐することは、一時的に当該空間周辺のエスニック・ロシア人と非ロシア人との衝突を回避することには役だっても、ホスト社会に潜む衝突そのものを解消することにはならない。別の空間で、新たな移民空間が生産されるたびに、その空間が憎悪を生み出す空間に転化する。反移民感情の高まりを世論調査などで傍観するだけでは解決できない難しさを、ロシアは市民レベルで経験している。

移民たちが形成したルイナックは、確かに1990年代の遺制である。ただし、それは忌避される空間としてではなく、市場経済化における不安定なロシアが生み出した空間的回避であった。1990年代に物不足やインフレに苦しむ市民に海外から仕入れた安い商品を市民に提供したのは、移民たちだった。それは、ルイナックという空間を通じて、豊かさを約束するはずだった市場経済化が貧困を生み出したという意味で矛盾や限界を露呈させたときに、それらの矛盾や限界を回避し、巧みに生活に必要な商品にアクセスする抜け道を生み出していた。2000年代以降、ロシアが「安定」を構築していくなかで、不安定なロシアを支えてきたルイナックは、ルイナックの境界の外側のランドスケープが近代化し、繁栄していくなかで、ルイナックのランドスケープを「非衛生的」で非ロシア人的であるといったロシア的文化コードによって差異化し、そのランドスケープの価値を貶め、破壊していった。そのプロセスは、同時に、そこで暮らし働く移民たちの存在をないがしろにし、彼らの暮らしと労働を不安定なものとし、市民の生活空間のなかに飛び地のように形成された忌避すべき空間の住人として彼らを位置づけていったのである。ルイナックというエスノ・ランドスケープは、ロシアの現在の安定に付随して構築された不安定な空間である。その結果、ルイナックという空間は、行政によって再編と放棄を求められている。当局による「文明的な政策」¹⁴により、ルイナックという空間から放逐された移民労働者たちは、路頭に迷うか、本

¹⁴ より「文明的な」政策により排除される移民については、Radio Free Europe/ Radio Liberty: <https://www.rferl.org/a/russia-migrants-tough-year/25214624.html> (2019年5

国へ強制送還されている。しかし、移民労働者たちと市民との間の境界が解消されたわけではない。現在、ルイナックという空間は縮小しているか、もしくは、破壊されているものの、移民たちと市民とを隔てるルイナックの境界は、依然として移民たちと市民の双方によって維持され、反移民感情を維持、発露させる両者の接点となっている。

参考文献

オレフ, グリゴリー, 2010, 「ロシアにおける超エスノフォビア」, 堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』ミネルヴァ書房, pp. 309-339。

ドストエフスキー, 1978, 「罪と罰 (I)」『ドストエフスキー全集 7』新潮社。

ドストエフスキー, 1979, 「未成年 (II)」『ドストエフスキー全集 14』新潮社。

ルフェーブル, アンリ, 2000, 『空間の生産』青木書店

堀江典生, 2018, 「壁の向こう側: 中央アジアから来た建築労働者たちの労働と暮らし」『ユーラシア研究』第 57 号, pp. 27-31。

堀江典生, セルゲイ・リャザンツェフ, 2010, 「モスクワの中央アジア移民: 移民の語りから構築する中央アジア移民像」, 堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』ミネルヴァ書房, pp. 135-163。

山田実, 山田ゆきよ, 2010, 『サンクトペテルブルクの異邦人: 芸術と文化, 歌と生活』未知谷。

Abashin, Sergey, 2017, Migration policies in Russia: Laws and debates. In: Anna-Liisa Heusala and Kaarina Aitamurto eds., *Migrant Workers in Russia: Global challenges of the shadow economy in societal transformation*, Oxon: Routledge, pp. 16-34.

Bagaeen, Samer, and Ola Uduku, 2010, Gated histories: An introduction to themes and concepts. In: Samer Bagaeen and Ola Uduku eds., *Gated communities: Social sustainability in contemporary and historical gated developments*, Oxon: Earthscan, pp. 1-13.

Brunn, Stanley, 2006, Gated minds and gated lives as worlds of exclusion and fear, *GeoJournal*, 66 (1-2), pp. 5-13.

Chapman, H., K. Marquardt, Y. Herrera, and T. Gerber (2018) Xenophobia on the rise? Temporal and regional trends in xenophobic attitudes in Russia. *Comparative Politics*, 53(3), pp. 381-394.

Coalson, Robert, 2013, Russia's Aleksei Navalny: Hope of the nation or the nationalists?, *RadioFreeEurope* : <https://www.rferl.org/a/russia-navalny-nationalist-fears/25059277.html> (accessed 18 December, 2018).

Dmitoriev, Anatoliy, 2015, Ethnic groups of migrants and conflicts in enclave labor market, *Sociological Studies*, 8, pp. 90-100 (Дмитриев, Анатолий и Григорий Пядухов, 2005, Этнические группы мигрантов и конфликты на анклавных рынках труда, *Социологические исследования*, 8, pp. 90-100).

Dmitoriev, Anatoliy, 2015, The migratory stereotypes in communications, *Communicology*, 3(3), pp. 140-146 (Дмитриев, Анатолий, 2015, Миграционные стереотипы в коммуникациях,

月 2 日取得) を参照されたい。

Коммуникология, 3(3), pp. 140-146).

Dyatlov, Viktor, 2009, Transfrontier Migrants in modern Russia: Dynamics of stereotypes development, *International Research: Society. Politics. Economics*, 1(1), pp. 140-153 (Дятлов, Виктор, 2009, Трансграничные мигранты в современной России: динамика формирования стереотипов, *Международные Исследования Общество. Политика. Экономика*, 1(1), pp. 140-153).

Gorodzeisky, Anastasia, Anya Glikman, and Dina Maskileyson, 2015, The nature of anti-immigrant sentiment in post-socialist Russia, *Post-Soviet Affairs*, 31(2), pp. 115-135.

Horie, Norio and Kostantin Grigorichev, 2015, Chinese market evolution in Siberia: Reshaping “Chineseness” and opening “gated localities”. In: V. Dyatlov and K. Grigorichev, eds., *Ethnic Markets in Russia: Space of bargaining and place of meeting*, Irkutsk: Publishing House of ISU, pp. 141-158 (Норио Хорие и Константин Григоричев, 2015, Эволюция китайских рынков в Сибири: пересборка «китайскости» и открытие «закрытых» локальностей, ред. В. И. Дятлов, К. В. Григоричев, *Этнические рынки в России: пространство торга и место встречи*, Иркутск : Изд-во ИГУ).

Kolstø, Pål, 2014, Russia’s nationalists Flirt with Democracy, *Journal of Democracy*, 25(3), pp. 120-134.

Kolstø, Pål, 2016, Introduction: Russian nationalism is back – but precisely what does that mean?. In: Pål Kolstø and Helge Blakkisrud eds., *The New Russian Nationalism: Imperialism, Ethnicity and Authoritarianism 2000-15*, Edinburg: Edinburgh University Press, pp. 1-45.

Kosmarskaya, Natalya, 2018, "Corruption", "crowds", and "lezginka": Regional specifics of attitudes towards migrants in present-day Russia (The case-study of Moscow and Krasnodar), *Journal of Sociology and Social Anthropology*, 21(2), pp. 187-213 (Космарская, Наталья, 2018, «Коррупция», «толпы» и «лезгинка»: региональная специфика отношения россиян к мигрантам (на примере Москвы и краснодара), *Журнал социологии и социальной антропологии*, 21(2), pp. pp. 187-213).

Kosmarskaya, Natalya, and Igor Savin, 2016, Everyday nationalism in Russia in European context: Moscow resident’s perceptions of ethnic minority migrants and migration. In: Pål Kolstø and Helge Blakkisrud eds., *The New Russian Nationalism: Imperialism, Ethnicity and Authoritarianism 2000-15*, Edinburg: Edinburgh University Press, pp. 132-159.

Kuznetsova, Irina, 2017, Dangerous and unwanted: policy and everyday discourses of migrants in Russia. In: Agnieszka Pikulicka-Wilczewska and Greta Uehling eds., *Migration and the Ukraine crisis: A two-country perspective*, Bristol: E-International Relations Publishing, pp. 149-163.

Laine, Veera, 2017, Contemporary Russian nationalisms: the state, nationalist movements, and the shared space in between, *Nationalities papers*, 45(2), pp. 222-237.

Laruelle, Mariene, 2014, Alexei Navalny and Challenges in Reconciling “nationalism” and “Liberalism”, *Post-Soviet Affairs*, 30(4), pp. 276-297.

Parzer, Michael, and Franz Astleithner, 2018, More than just shopping: Ethnic majority consumers and cosmopolitanism in immigrant grocery shops, *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 44(7), pp. 1117-1135.

Peshkova, Vera, 2015, Migrant infrastructure in Russian cities (the case of labour migrants from

- Uzbekistan and Kyrgyzstan in Moscow), *Universe of Russia*, 24(2), pp. 129-151 (Пешкова, Вера, 2015, Инфраструктура трудовых мигрантов в городах современной России (на примере мигрантов из Узбекистана и Киргизии в Москве), *Мир России*, 24(2), pp. 129-151).
- Round, John and Irina Kuznetsova, 2016, Necropolitics and the migrant as a political subject of disgust: the precarious everyday of Russia's labour migrants, *Critical Sociology*, 42(7-8), pp. 1017-1034.
- Sevortian, Anna, 2009, Xenophobia in Post-Soviet Russia, *Equal Rights Review*, 3, pp. 19-27.
- Tkach, Olga, and Olga Brednikova, 2016, Labour migration and the contradictory logic of integration in Russia. In: Ilkka Liikanen, James Scott and Tiina Sotkasiira eds, *The EU's eastern neighbourhood: Migration, borders and regional stability*, NY: Routledge, pp. 201-217.
- Vaughan, Laura, 2015, The ethnic marketplace as point of transition. In: Anne Kershen ed., *London the promised land revisited: The changing face of the London migrant landscape in the early 21st century*, London: Routledge, pp. 35-54.
- Zhelkina, Anna, 2011, Cultural significance of consumption spaces in a post-Soviet city as exemplified by St Petersburg shopping centers, *Vestnik of Saint Petersburg University. Sociology*, 1, pp. 330-335 (Желкина Анна, 2010, Социокультурное значение пространств потребления в постсоветском городе (на примере торговых центров Санкт-Петербурга), *Вестник Санкт-Петербургского университета. Серия 12. Социология*, 1, pp. 330-335).
- Zhelkina, Anna, 2011, "It's like a museum here": The shopping mall as public space, *Laboratorium: Journal: Russian Review of Social Research*, 3(2), pp. 48-69 (Желкина Анна, 2011, «Здесь как музей»: Торговый центр как общественное пространство, *Laboratorium: Журнал социальных исследований*, 3(2), pp. 48-69).